



※青文字は現在の通称名
赤文字は遺構名

史跡

しょういんかわしりじょうあと

73. 正院川尻城跡

■指定年月日 平成20年5月26日(2008)

■指定面積 41,514.16㎡

■所在地 正院町川尻

■所有者 個人・珠洲市

正院川尻城跡は、飯田湾を臨む標高約30mの台地先端部にある。地元では、「要害」「下要害」「高要害」などと呼ばれている。城郭は、五つの平坦部(郭)から成り、広いものは約100×50mを測る。そのほか腰郭、土塁、堀、井戸、塚などが確認できる。平山城に分類される、県内屈指の中世城館跡である。これは、鳳至郡大屋荘の地頭長谷部信連の一族が、珠洲郡支配の拠点として鎌倉後期ころから整備を始めたと考えられている。

昭和59～61年(1984～86)の試掘調査では、幅13m、深さ約6mの空堀跡が検出されている。平坦部では溝跡、柱穴が検出され、掘立柱建物の存在が推定された。出土品は土師質土器、珠洲焼、瀬戸焼、中国染付片などがあつた。

天正4年(1576)、越後の上杉謙信が能登攻めを開始し、畠山氏(七尾城)を滅ぼして能登全域を占領した。上杉家臣の長景連が、珠洲郡支配のために川尻城に入った。景連は越後の黒滝に住んでいたため黒滝長ともいい、このため本城は後に黒滝城とも呼ばれた。天正7年、畠山旧臣の温井景隆らの反撃をうけ、敗れた景連は越後に撤退した。天正10年、景連はふたたび奥能登に攻め込むが、前田利家の与力長連龍に撃退され、川尻にて討ち取られたと言われる。景連の先祖は正院から越後に渡ったとされ、連龍とは長谷部信連につながる同族であった。

その後、川尻城に城主が入ることはなく、間もなく廃城となったようだ。